

Ricci, Signora Elisa. Old Italian lace. London, William Heinemann, 1913. 2vols. 36.5×26.5cm <753.2-R-1~2>

Hiler p. 748

19世紀後半、イギリスに起った美術工芸運動はレースの分野にも波及し、古い手工レースの技術の復興や複製品の制作が盛んに試みられたが、またその関係文献も多数出版された。本書はそうした一種の流行の比較的後期に、レース発祥の地であるイタリアの研究者が著した2巻からなる大著の英訳本である。

著者はレース発生の時期を15世紀後半と見做し、そこからその最盛期である17世紀前半までに焦点を合せ、当時の写実的かつ細部まで克明に描写した絵画や、手芸のためのパターンブックと、名家の財産目録、財産分割の証書、嫁入り支度の目録、奢侈禁令、文学作品等の文字史料を駆使して、実証的にその歴史を追っている。また実物レースの写真図版はイタリア諸都市のみならず、世界各地の美術館、博物館、個人、著者自身などの所蔵品から集められ、豊富さと明瞭さ、及び説明としての適切さのみならず、その美しさは注目に値する。

第1巻は刺繍の技法を基礎とし、原則として一本の糸で行うニードル・レースに、第2巻ではボビンとクッションを用いるボビン・レース（ピロー・レース）に当てられている。前者では透かしの効果のある刺繍の初期的段階から、地布を用いずに紙に描いた図柄の上に直接ステッチを進めて行く最終段階までと、さらにその衰退期を、その技術毎に章をまとめている。つまり、1. ネット刺繍、ドローン・ワーク、2. プント・ア・レティチェロ、3. プント・イン・アリアである。これに対し後者では、それが極めて強い地方的特色を有することから、1. ヴェネチア、2. ジェノヴァ、3. ミラノ、4. アブルッツィの順に、産地毎に章が進められている。いずれの章も多少の図版を伴う本文の後に、図版の頁が続くという形式である。

両巻ともに20頁前後の序文があり、そこにはレースの起源や、二大手法であるニードル・レースとボビン・レースの性質上の差異に関する考察が述べられていて興味深い。ニードル・レースの起源については、それまで例えば鉄、象牙、金銀、大理石などの透かしのある細工や装飾性のない単純な網地までをも“レース”とする前提から導かれる東洋説、古代エジプト説、14世紀イタリア説、あるいは漠然としたフランドル説などがあった。これらに対してリッチは、レースを飽くまでも糸による技法として定義し、また浩瀚な史料を例証として、単なる刺繍や房飾りから糸による透かし効果のある刺繍へと飛躍する時期を、15世紀の後半、場所をヴェネチアとしている。つまり、レースを近代ヨーロッパ固有の技法として見る所に筆者の文化史観を披瀝しているわけである。

なおイタリア語初版 *Antiche trine italiane*. Bergamo, 1908 <753.3-R> では、第1巻が2分冊になっていて本館にはその第2部が欠けている。(能沢)